

「せ〜んば〜いw♡今日もお一人で寂しくご飯ですか〜？♡なっさけな〜w♡友達の一人くらい誘えばいいじゃないですか〜w♡」

校舎の隅っこ、誰も使わない空き部屋に高く、うっとおしさを感じさせる声が響く。

煽られた『先輩』と呼ばれる男は、この空き部屋で一人飯を食べることが入学当初からの日常だった。

「あ、ごめんなさいせんば〜いwそういえば先輩に友達なんていませんでしたね〜w♡良かったじゃないですか、私が来てくれて♡」

パーソナルスペースなど知ったことではないと言わんばかりに、女...椎木(つちぎ)レリヤは男の隣に腰かけた。

「言っときますけど、私は先輩と違って友達なんてた〜っくさんいますから♡ホントはわっざわざこんなかび臭いところ来る必要ないんですからね♡」

そう言うと、レリヤは男の腕に抱きつき、自らの胸を押し当てる。平均的な身長に、整った顔。それに加え同年代に比べ大きな胸が、男の腕に押し当てられ形を変える。

しかし男は、それを意に介す素振りも見せず弁当を再び食べ始める。

「むっ...先輩のくせに、この私の色仕掛けに無反応とは...ナマイキですよっ！こらっ！先輩こらっ！！ちょっとくらい反応しろ！」

それもそのはず、レリヤは男が学校で一年ほど過ごしたある日突然絡んで来たかと思えばその日から毎日のようにこうして煽りに来ているのだ。しかもこういった色仕掛けで。

初めの方こそ胸の感触や、レリヤの息遣いにドギマギさせられこそしたものの、数ヶ月たった今ではもう慣れてしまったのだ。

「せーんーばーいー！！まさか、このレリヤちゃんの美貌が目に入っていないとか言いませんよね〜！？！？目え腐り落ちたんですか〜！？」

それともう一つ理由がある。

男は弁当を端に置き...空いた手で徐にレリヤの乳首を乱暴に捻り上げた。

「おゝ ひいっ！？！？♡♡♡おゝ ッ♡♡♡いぎゅっ♡♡♡いぎゅっ！！♡♡♡」

ぶしいっ♡♡♡

あっけなく潮を吹き、パンツどころかスカートまで汚れるほどの潮を吹くレリヤ。その目は快楽で虚ろになり、ほへ〜♡っと舌を天井に突き出している。

男とレリヤの間には、こういう上下関係が生まれていた。そしてレリヤは、それに喜ぶ生粋のマゾでもある。

「せ...せんばっ...いぎな...りいっ...♡♡♡」

レリヤの弱弱しい声も無視して、男はレリヤの乳首を握り締める。

その衝撃でまたぶしっ♡と軽アクメ潮を吹きみっともない甲高声が部屋に響く。

「ふびっ♡♡♡ちょ、ちょっとっせんば...っ♡♡♡なにしてっ...」

そして、男は握り締めた乳首を吊り上げ、レリヤの体を持ちあげる。

全体重が乳にかかり、レリヤのみっともない姿はさらに加速してゆく。

「ふぉ おぉ おおぉ ツツツ.....!!!♡♡♡♡♡やべっ♡♡♡これやべっ♡♡♡♡まっでっ♡♡♡まっでくださいせんぱっ♡♡♡までっ!!!♡♡♡」

痛みからかアへ顔晒しながらも、『下』のマゾにあるまじき命令口調と睨みが飛び出したのを見て、男は少しだけレリヤの方を見て軽く笑いかける。

たったそれだけでレリヤの表情は強張り、「え、えへへ...♡♡♡」と媚びた声になる。

「うっ、うそっ♡♡♡うそぴょ〜〜〜んっ♡♡♡レリヤちゃんのからだっ♡♡♡せんぱいの所有物だから好きにしていぴょ〜んっ♡♡♡...で、でもちょっとくらい優しくするのがマナーじゃないかなあなんも」

空いている手がレリヤのおまんこに振り下ろされた。

「お ひいんっっ♡♡♡わっ、わだしなにもわるいこと言ってないもんツツツ♡♡♡♡せんぱいがわる いツツツ♡♡♡ペットにやさしくしないせんぱいがわるいんだもんっっ♡♡♡」

その割におまんこ平手打ちで潮を吹くくらい喜んでいのだが、男はそこには言及しないことにした。一回本当に嫌がっているのかと思い手を出さないでやったらほんのり不機嫌になったのだから理不尽なものだ。

「だからっ♡♡♡だからせんぱいはもっと私にやさしくするべきですっ♡♡♡ほらっ♡♡♡ほらっ♡♡♡♡♡」

そう言うとレリヤは腰をへこっ♡へこっ♡と振ってみせる。恐らくもう何回か叩いてほしいのだろう。

だが、言うとおりにするのも癪だった男は叩くフリをしておまんこに手を当てる。

「きたっ.....???♡♡♡はぁっ?せんぱい、そこで優しくするとかちんちんついてるんですか???♡♡♡まったく、ホントにへにゃちんなんですからっ...」

ぐちぐちぐちぐちぐちツツツ♡♡♡

そして、全力でおまんこを擦ってやる。

「お ぐうッ!?♡♡♡ちょっ、まっ♡♡♡これキくっ♡♡♡♡♡女の子の大切なとこいじめられてアグメキめるっ♡♡♡イぐっ♡イぐイぐイぐッッッ!!!♡♡♡ふじゃけんなツツツ♡♡♡」

いったところで止めず擦り続ける。クリも同時に潰されたレリヤの口からはもはや絶叫にも似た喘ぎ声が出始めているが、言動とは裏腹にレリヤの口元は酷くにやついている。

「もうっ♡♡♡せんぱいのせいでっ♡♡♡♡せんぱいのせいで収まりが効かなくなっだッ♡♡♡責任とってっ♡♡♡責任とって今日もおまんこ気持ちよくしてツツツ♡♡♡」

ぶしゅっ♡♡♡ぶしゃあぁっ♡♡♡

壊れた蛇口のように潮を吹くレリヤ。

これがいつもの流れ。レリヤが男にダル絡みをして、男があしらうように軽く弄ってやれば『仲良し』の成立ということになる。

突き飛ばすようにレリヤを教室の地面に寝かせる。

「きゃっ...♡♡♡やぁん♡♡♡せんぱいにおそわれる〜♡♡♡けだもの〜♡♡♡」

自分からやれと言ったのに、期待交じりの目で男を煽るレリヤ。
男は立ち上がると、靴を脱ぎレリヤのおまんこを踏みつける。

「ふっ...ぎゅウッ...♡♡♡はぴっ..♡♡♡♡♡」

恍惚の表情で快楽に耽るレリヤをよそに、男は弁当に再び手を付ける。
片手間に踏まれ、あまつさえそれでアクメするという屈辱的な行い。レリヤはその状況に得難い興奮を感じていた。

「もっ...どっ.....♡♡♡もっどっ、したらどうですかァ...?♡♡♡♡♡ひひっ♡♡♡せんぱいのことだからあ...♡♡♡そんな興味なさそうな面してるけど...ほんと～は私のこと...いじめたくてたまらないんでしょお...?♡♡♡」

レリヤの物言いを気にする素振りもなく、男は弁当を食べる片手間にレリヤのおまんこを踏み潰す。
ぐり、ぐりと抉られるたびにレリヤの脳髄にはピンク色の光が瞬く。

「ふぎゅうっ.....♡♡♡ふぎぎぎぎッ.....♡♡♡♡♡こ、こんなじゃ、イってあげられませんが～???♡♡♡ほらほら、が～んばれ♡が～んばれせ～んぱい♡後輩おまんこ負かせてみせろ～♡♡♡」

絶賛片手間に蹂躪されている最中だというのに口の減らないレリヤにいい加減苛ついたのか、男は先ほどよりひととき強くレリヤのおまんこを踏みつける。
更に強くしてもらうためにアクメを我慢していたレリヤは、『ご褒美』にあっけなく絶頂してしまう。

「ふぐうっ♡♡♡イぐっ♡♡♡イぐイぐイぐッッ♡♡♡♡♡踏まれてアグメしまずっ!!!♡♡♡♡♡」

ぶしやあああああッッ♡♡♡

レリヤもさっきより強く潮を吹き、五体投地で潰れたカエルのように息を吐く。
ちょうど弁当を食べ終わった男がそんなレリヤを見て立ち上がり、バッグから未開封の飲料水を取り出した。
その水を、自分の足で汚れたレリヤのおまんこに流し洗う。

「.....?...♡♡♡ひひっ♡♡♡」

やっと絶頂から復帰したレリヤは、自分のおまんこを洗う男を見て何かに気づいたようで期待が多分に込められた笑みを浮かべた。

「.....これ、ぜ～んぜん独り言なんで気にしないでいいんですけど～～～.....」

「今日は.....ぽっこぼこにされてもいい気分です♡♡♡」